

五百羅漢寺と亀戸天神社への道しるべ

五百羅漢道標を指定!!

江東区教育委員会は、文化財保護審議会（会長・中村ひろ子・神奈川大学教授）の答申を受け、平成17年度諮問分のうち、区文化財として新たに1件を指定、6件を登録し、1件を登録解除、1名を認定解除しました。また、無形文化財（工芸技術）の認定変更により1件追加されました。この結果、登録文化財の総数は1036件、指定文化財は25件になりました。



指定文化財
【有形民俗文化財】
五百羅漢道標 文化二年再建銘
 猿江2 16 小名木川橋橋台地
 小名木川と四ツ目通りが交差する小名木川橋の北詰に建っている高さ129・5cmの石碑です。昔はこの地にあった庚申堂の前に置かれていました（『新撰東京名所図会』）。
 造立の年代はわかりませんが、享保16年（1731）2月、寛政9年（1

797）2月、文化2年（1805）8月の3回にわたって再建されたことが刻銘からわかります。庚申堂が建てられたのが宝永8年（1711）です。あるいは同時期に建てられたのかも知れません。また、建立したのは、猿江町の庚申講の人々です。
 道標とはその名の通り、昔の道しるべのことです。ここから小名木川を東に進むと、五百羅漢寺にいたり、四ツ目通りまたは横十間川を北に進むと亀

現在、この道標にはいくつもの亀裂が見られ、大変危険な状態です。区教育委員会で補修をする予定ですが、交通量の多い場所であるため、区民の皆さんも十分に気を付けてください。

社へ参詣に訪れる人々の案内板の役割を果たしていたのです。また、小名木川を通行する船や、川沿いの道を往来する人々のランドマークとしても機能していました。文政元年（1818）に江戸の朱引きが確定し、横十間川を境に西側が江戸御府内、東がその外と定められました。つまり、小名木川を通行する人々にとつて、この道標は江戸の境界を示す道しるべでもありました。さらに、この道標が小名木川に向つて建てられていたことは、川岸を歩く人々だけでなく、船から見えることも意図していたと考えられ、陸路と水路の両交通路を対象とした特徴を持っています。

下町文化

NO. 233
2006.4.27

発行
 江東区教育委員会
 生涯学習部生涯学習課
 〒135-8383
 江東区東陽4-11-28
 TEL.(03)3647-9819
<http://www.city.koto.lg.jp/>

17年度新指定・新登録文化財紹介

芭蕉記念館25周年記念特別展
 俳諧の流れ
 - 宗鑑・芭蕉・蕪村そして一茶 -
 文士尾崎紅葉の世界

時雨忌記念講演録
 「芭蕉の言葉に学ぶ創作法」

江東歴史紀行
 「江戸・東京の釣り名所 中川」

囲炉裏ばた(大石家日記)

寄贈民俗資料リスト

工匠館展示替え

戸天神社に着きます。つまりこの道標は、大島の名刹五百羅漢寺と、江都を代表する名所亀戸天神



『新撰東京名所図会』(明治42年)手前の小屋の前に建っているのが道標

登録文化財

【有形文化財(建造物)】
石造鳥居 六之橋若者中奉納

亀戸9 15 7 浅間神社

浅間神社境内の東南に建っています。



昭和3年(1928)7月に六之橋(北本所)出村・南本所出村の俗称、現在の亀戸9、大島7(9)の若者中が奉納しました。この鳥居は平成9年に本殿が移転する前は東側の参道入口に建っていました。

【有形文化財(絵画・彫刻・工芸品)】
木造阿弥陀三尊像

三好1 4 5 勢至院

阿弥陀如来像と脇侍の観音菩薩像、勢至菩薩像の3体によって構成されています。阿弥陀如来像は、頭部に南北朝時代の特徴が認められますが、体は江戸時代の作と考えられます。おそらく、南北朝時代に作られた像の体を、江戸時代に補修したものと思われる。また、両脇侍像はその時に造立されたものと考えられます。

木造阿弥陀如来立像

三好1 6 3 長専院

三尺阿弥陀と称される来迎形式の阿弥陀如来立像です。着衣の形式は、鎌倉時代中期より一般的になるスタイルで、全体にバランスがよくとれた作品です。高さは75・6cm、形姿と造像技法から鎌倉時代後期の作と考えられます。



【有形民俗文化財】
水盤 剣大講奉納

富岡1 17 13 深川不動堂

境内の西側の水屋にあります。正面に「劔大」と大きく刻まれています。これは成田山新勝寺の講社である劔大講のことで、永代寺内陣五講の1つでもあります。文字は明治・大正期の著名な書家 柳田泰麓が書いたものです。泰麓は関東大震災まで現在の深川公園内に泰麓書道会を開いていました。



力石 天神下内田金蔵

八町堀亀島平蔵奉納

亀戸3 6 1 亀戸天神社

平成15年の池の改修工事の際に、護岸の石材の中から発見されました。この力石は2回奉納されたことが刻銘から確認できます。1度目は和泉国(現大阪府)の住人梁川氏が文化9年(1812)に奉納したと考えられます。2度目ははつきりとした時期はわかりませんが、文化・文政期の力持ちとして有名な内田屋金蔵と、亀島の平蔵が奉納しました。金蔵は神田明神下の酒屋内田屋の奉公人で、この時代に活躍した素人力持ちの大関です。富岡八幡宮の燹(はんかい)石も金蔵が奉納したものです。一方の平蔵は「石の平蔵」と呼ばれた有名な力持ちで、佐賀稻荷神社にも力石を奉納しています。



【史跡】
長谷川如是閑誕生地

木場3 16 付近

如是閑は近代日本を代表するジャーナリスト、思想家です。明治8年(1875)11月30日に、材木商山本徳治

郎の次男として、深川扇町2番地(現在の木場3 16)で生まれました。明治14年に明治小学校に入学しましたが、父徳治郎が材木商をやめ、浅草の花屋敷を開業したため、浅草に移りました。その後、坪内逍遙などに学び、英吉利法律学校(現中央大学)を経て、明治35年に新聞『日本』(主筆陸羯南)に入社しました。その後、大正デモクラシー運動や、国家主義・ファシズム批判を主導し、戦後は貴族院勅選議員として新憲法の制定に携わりました。

如是閑は自伝で、幼年期に木場・浅草で育ち、逍遙やイギリス法学の学風を受けたことが、現実主義的合理主義や庶民感覚を育んだと述べています。

登録解除
【史跡】
初代・二代坂東彦三郎墓(浄心寺)
(解除理由) 区外へ移転のため

認定解除
【無形文化財(工芸技術)】
杉田礼二(提燈製作)
(解除理由) 逝去のため

認定変更
【無形文化財(工芸技術)】
金工(鷹口)

荒木鷹口工業所 中川修二
染織(更紗染) 更浜 佐野利夫、佐野勇二

芭蕉記念館開館25周年記念特別展

俳諧の流れ

一宗鑑・芭蕉・蕨村そして一茶

文士尾崎紅葉の世界

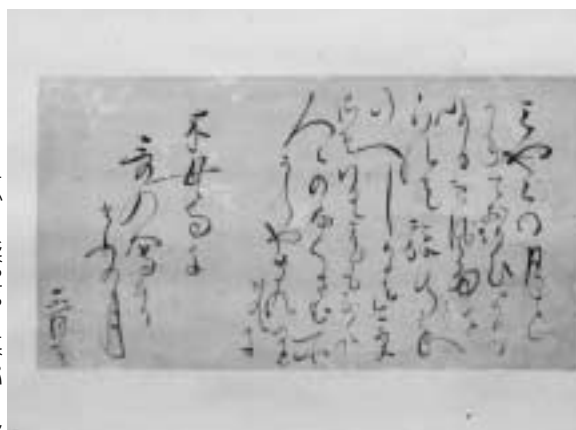
平成18年7月9日(日)まで

江東区芭蕉記念館は、昭和56年(1981)4月19日の開館から25周年を迎えます。これを記念して芭蕉記念館では、開館25周年の記念特別展を開催します。今回の記念展では、これまで一部の専門書や図録などでは紹介されたことはありませんが、原物資料の展示としては、43点の作品すべてが本邦初公開となる大変貴重な展示です。



芭蕉筆「風流の」三物懐紙

「俳諧の流れ」の展示では、荒木田守武や松永貞徳とともに「俳諧の三神」の一人といわれた山崎宗鑑の「みやこいで」句短冊、談林俳諧の祖として知られ、昨年西山宗因の「生誕四百年記念展」が各地で開催・注目されているなか、本展で初公開となる宗因の「月の色や」句文と「けふとなふ」句短冊の2点の資料、また松尾芭蕉の資料としては「奥の細道」の旅中の元禄2年(1689)4月22日から28日まで、須賀川の相楽等躬宅滞在中の作の「風流の」三物懐紙と、芭蕉が使用したとされる「芭蕉翁伝来荷葉硯」の



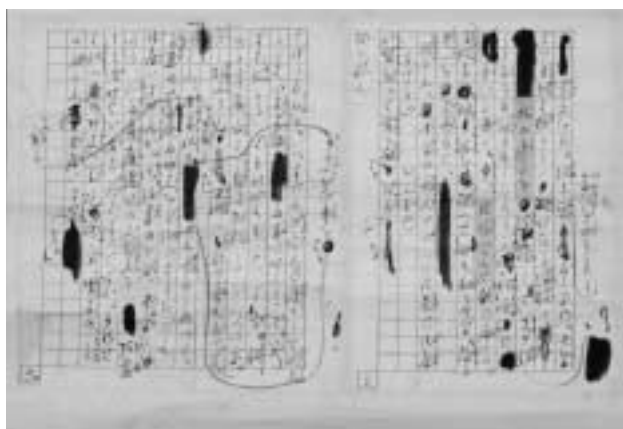
其角筆「木母寺に」句文

2点、蕉門の其角・文章・去来・支考などの俳人の作品、そして蕉風復興運動に尽した蕨村の「牛祭」句文から一茶の「おらが世や」句自画賛などまでの29点を一堂に会します。

また「文士尾崎紅葉の世界」の展示は、小説家であり、俳人としても知られた紅葉の作品を紹介するもので、紅葉が東大の国文学科1年当時の備忘録や、『続金色夜叉』の一部原稿、俳句の自筆短冊のほか、斎藤松洲の「紅葉病室俯瞰の図」卷子など14点を公開します。

今回のこの展示は、今後、これだけの未公開資料を一堂の会することはほとんどないものと思われます。この機会には是非御覧ください。

(横浜文学)



尾崎紅葉筆『続金色夜叉』原稿二葉貼込幅

芭蕉記念館

開館時間

午前9時30分～午後5時

(4時30分までにお入りください)

展示室休室

毎週月曜日

入館料

大人100円・小中学生50円

交通

都営地下鉄新宿線・大江戸線

森下駅下車 徒歩7分

問合せ

江東区芭蕉記念館

江東区常盤1 6 3

☎03(3631)1448

「芭蕉の言葉に学ぶ創作法」

上智大学教授 大輪 靖宏



色からは沈うつ、暗いというイメージが湧く。街の名に黒を使わないで緑を使ったということが最低限ではあるが文学的な表現の第一歩ということになる。このような言葉を組み合わせると、単語の数を越えた意味の広がり・表現されるものが生じて来る。そういう言葉をどういう風に使うのか、芭蕉の言葉を元にしてお話ししてみたい。

1. 取り合わせ

発句は物を合はすれば出来せり。その能く取り合はすを上手と云ひ、悪しきを下手と云ふなり。(去来抄)

発句はとり合はせ物也。二つとり合はせて、よくとりはやすを上手と云ふ也。(篇突)

夏草や兵どもが夢の跡 この句では「夏草」と「兵どもが夢の跡」が取り合わせてある。この「夏草」はたまたま目に触れたから詠み込んだというものではない。夏草には繁殖力、秩序を持たない乱雑さ、むっとする草いきれ、しかも秋になれば枯れ果てて土に戻ってしまうはかなさなどがある。この夏草を「兵どもが夢の跡」に取り合

わせることによって戦いによって亡び去った兵たちの姿が浮びあがってくる。野卑で血と汗にまみれた兵士達のはかなく亡び去って行ったさまが感じられる。平泉において芭蕉が目についたものは夏草だけではない。「夏の風」や「夏の雲」や「夏木立」も目になっている。例えば「夏木立兵どもが夢の跡」としてみると「夏木立」の持っている整然とした爽やかなすつきりとした印象は血と汗にまみれた兵たちとは合わない。やはり芭蕉は多くのものの中から最良のものを選び出しているのである。「能く取り合はすを上手と云ふ」である。

2. 行きて帰る心

発句のことは行きて帰る心の味はひなり。例へば「山里は万歳遅し梅の花」といふ類なり。「山里は万歳遅し」と言ひはなして、梅は咲けりといふ心のことくに、行きて帰るの心、発句なり。(三冊子)

取り合わせるにしても同じようなものを取り合わせてしまったら、両方が同じ方向を向いているから意味がない。また離れ過ぎては両方がばらばらになってしまう。その取り合わせの微妙な距離感を、芭蕉は「行きて帰る心」という言葉で説明している。山里は万歳が回って来るのが遅いと言っておいて、しかし梅の花は他と同じように咲いて

いるというように方向性の違うものを取り合わせるのが発句だということである。山里は万歳も遅いし、梅の花の咲くのも遅いというのでは、取り合わせた二つのものの方向性が同じになる。万歳も来ない、梅の花も咲かないでは、山里は死んだ光景になってしまう。「山里は万歳遅し」に対して、しかし梅の花は咲いているという方向性の違うものを取り合わせると、眠ったような山里に生命が通う。世間から忘れられたような山里であってもそれなりの生命の営みがあるということになり、平板な風景描写ではなくなる。

古池や蛙飛びこむ水の音 の場合も同じことが言える。古池とは単に年代が古いということではなく、使われていない池、人から見捨てられた池のことである。そういう池だから何の動きもないというのなら、情景が死んでしまふ。そういう池であっても蛙の飛び込む水の音がすると言えばこの情景が生きてくる。この場合も「古池」と「蛙飛びこむ水の音」が行きて帰る関係になっている。

3. 金を打ちのべる

発句は頭よりすらすらと謂ひ下しきたるを上品とす。(去来抄)

発句は汝がごとく二つ三つ取り集めるものにあらず。金を打ちのべたる

はじめに

俳句は、言葉を元にした文学・芸術であるから、言葉をどう生かすかが大切になる。単純に物を指し示すのが言葉の基本的働きであるが、言葉は使い込んでいくうちにその言葉の背後に、物を指し示す以外のいろいろな別の意味が加わっていく。例えば街の名前に「緑が丘」というのがある。「黒が丘」とは聞かない。緑も黒も色を指し示す言葉であるが、緑という色からは若々しさ、生命力が感じられる。黒という

ごとくなるべし。(去来抄)

芭蕉の言うところは、発句は初五からすらすら滞りなく詠み続けたものが一番良いと言うことである。金を槌で叩いて延ばしたようにと言うのは、「頭よりすらすら謂ひ下す」とことと同じである。二つ三つ取り集めずの一つのことを金を延ばすようにして、言いくだせというのだ。これは、前段の取り合わせとは矛盾しているが、芭蕉は弟子の個性に合わせてそれぞれに指導しているのが相手によって言うことが違ふ。だから芭蕉の言葉は言葉だけを取り出すと随分矛盾しているが、それぞれに正しい言葉である。したがって芭蕉は取り合わせによって句をつくることを否定しているのではない。門人の許六が「先師の句、十に七八は必ず取り合せにて」と言っているほどである。ただ、取り合わせの仕方によっては技巧がまさり、不自然さが生じることもあり、安易な作り方に墮する可能性もある。それを戒めているのである。

4. 謂ひおほせて何かある(去来抄)

下臥に掴み分けばや糸桜 という巴風の句がある。花をいっばいにつけた枝垂桜の下に覆そべって地面にまで垂れているたくさんの枝を掴み分けて楽しんでみたいものだというような意味の句である。この句を去来が「糸桜

の十分に咲きたる形容。よく謂ひおほせたるに待らずや」と言ったのに対して芭蕉が「謂ひおほせて何かある」と言ったのである。言い尽してしまつたら、あとに何かがあるということかというのだ。何も無いではないか。巴風の句で思い出すのが富安風生の「まさななる空よりしだれざくらかな である。枝垂桜の説明をせず、真つ青な空よりと言うだけで、この枝垂桜が自分の上に覆い被さるように多くの枝を垂らしていることが感じ取れる。下に寝て掴み分けることができるほどだなど言わないのに、もつと雄大で枝の数も多いことが示されている。真つ青な空を背景として枝垂桜の鮮やかな色も感じ取れる。この句は言い尽していないからこそ、筆舌に尽し難いほど雄大な枝垂桜の見事さを表現出来たのである。俳句は全てを言ってしまうわないで、その手前のところで留めておくのが良い。むしろ言わないことで、そこから広がる意味の大きさを無限に拡大しようというのである。

5. 上手に嘘をつく

俳諧といふは別のことなし。上手に嘘をつくことなり。(俳諧十論)
初心者カルチャーセンターなどで、俳句は見たままをそのまま作ると教えられるが、本当にそうだからとそのまま

を作るのは俳句ではない。客観写生を唱えた高浜虚子は、写生とは見たままを言えばよいのかというとそんな軽はずみなものではありません、と言っている。芭蕉の「上手に嘘をつく」というのと同じことである。芭蕉は元禄7年の夏に「清滝や波に塵なき夏の月」という句を作った。その句を死ぬ3日前になつて「清滝や波に散り込む青松葉」に変えと言った。清滝は嵐山の麓を流れる桂川の上流で水の非常に美しいところである。その水の清らかさを「波に塵なき」と表現したのだが、「波に塵なき」は事実にしても説明的で、

水の清らかさを読者に直感的に感じ取ってもらうのは無理である。「青松葉」は清々しい印象を人に与える。その清々しさを感じ取って清滝の水と重ね合わせると、清滝の水の何の説明がないにもかかわらず清らかさが実感として読者に伝わってくる。芭蕉が意図したのはここである。芭蕉は夏に清滝の水を見て、塵一つない水の清らかさに感動した。しかし、「波に塵なき」というだけでは水の清らかさを読者に実感してもらうことが出来ない。そこで波に青松葉が散り込んでいっているという嘘をついたのだ。後になつて青松葉があつたことを思い出して追加したというのではない。あくまでもよりよい句にするために青松葉を付け加えたのだ。よりよき表現を求めて「上手に嘘をつく」ということが大切なのである。みちのくの淋代の浜若布寄す 山口青邨 実

るために青松葉を付け加えたのだ。よりよき表現を求めて「上手に嘘をつく」ということが大切なのである。みちのくの淋代の浜若布寄す 山口青邨 実

6. 古人の跡を求めず

古人の跡を求めず、古人の求めたる所を求めよ。(許六離別の詞)
芭蕉なら芭蕉の真似をしてはいけない。芭蕉が何を求めて努力しているか、そこを知って、芭蕉が求めた境地を目指さなければ、先細りになってしまう。

90分という時間は短くて十分意を尽くせませんでした。芭蕉の言葉を元にして俳句を作る参考になれば、また、俳句つてのは案外面白いものではないかという気持ちを持っていただければ、私としては有難いと思います。

*この記録は、昨年10月9日に行われた講演会の内容を要約したものです。

江戸・東京の釣り名所 中川

「隅田川を西川とも呼び、江戸川を東川とも称ふ。其の東西の二つの川の間を、一水の北より南へと往くものあり。流れて中に在ればなるべし、名づけて中川といふ……」

これは、明治時代の文豪幸田露伴が記した「中川」と題した文章の冒頭部分です。もともとは『グラフィック』明治43年（1910）2月下旬号に「折々草」として発表したものの一部で、その後『洗心録』に文章が再録される時に「中



現在の旧中川（江戸川区平井付近）

川」という題が付けられました。この文章にあるように隅田川と江戸川（東邊前利根川とされる）の中間にある川、として名前が付けられたと言われているのが中川です。露伴は、『風流伝』や『五重塔』などの著作で知られる作家ですが、一方で釣りを趣味としており、タナゴ釣りを題材とした『幻談』や中川での釣りのコマを記した『蘆声』などといった釣りに関わる文章も多く残しました。露伴は明治30年に神田から南葛飾郡寺島村（現墨田区東向島）へと住まいを移し、その頃から近くの中川に釣りに出掛けるようになったとされています（桜井良二「露伴と釣り」）。「中川」では、猿が又（現葛飾区東水元）よりの中川の流れを漢文調の格調高い文章で表現しており、中川に対する愛着が見えてくるようです。

かつて、中川番所があった頃も中川は釣りの名所でありました。享保8年（1723）に陸奥津軽藩の支藩黒石藩の当主津軽采女によって編まれた『何羨録』にも中川が取り上げられています。中川番所周辺の春鱸、秋鱸釣りの場

所を詳細に紹介しているのです。また、天保年間に刊行された『江戸名所図会』には江戸周辺の釣り場として多摩川の鮎とともに中川の鱸釣りが紹介されています。このように、当時の釣書には江戸近郊の釣り場として中川が紹介されており、江戸近郊の釣り場として認識されていたことがうかがえます（表参照）。そもそも「釣り」という行為が漁撈として

の手段だけでなく、趣味の一つとして取り上げられるようになったのは江戸時代中頃と言われています。したがって、釣り場としての中川は、釣りを趣味とする江戸の人々にいち早く認識されていたのです。

江戸時代から明治時代にかけて、中川周辺の景観は著しく変化を遂げました。それまではのどかな田園風景が広がっていた流域も、東京に近く水上交通にも恵まれていたことから工場が建ち並びはじめました。そして、なによりも中川の景観が一番変貌したのは、昭和初年に完成した荒川放水

路の開削でした。これによって中川が二つに分断されたのです。そして、上流は荒川放水路に沿う形で新たに水路が掘られ中川放水路となり、下流は木下川水門から昔の流路がそのまま残されました。これが旧中川です。このように大きく変貌をとげた中川流域でしたが、第二次大戦前までは手軽な釣り場として賑わっていました。

【表】江戸時代の主な釣書と中川

著者	書名	年代	中川に関する記述
津軽采女	『何羨録』	享保8年(1723)	「中川ヨリ釜洪梯マテ春鱸残魚ノ部」「中川ヨリ釜洪梯マテ秋鱸残魚ノ部」という節が設けられ、番所周辺から近くの堀割にいたるまでのハゼ釣り場が紹介されている。
不明	『東都釣案内図』	不明	東都諸川釣案内明細図に中川が紹介されている。
黒田五柳	『釣客伝』	文政年間(1818~29)	上・下巻に分けられ、「鮎野釣同切所鮎之事」、「泉水居水鯉鮎釣木場之釣事」、「鱧鯰泥亀釣之事」などといった節に中川周辺の釣り場が紹介されている。
不明	『釣竿類考』	文化年間(1804~17)	「中川の方にもかまじきなど釣の場あるよし……」など、隅田川や江戸湾と共に釣り場の一つとして中川が紹介されている。
不明	『於加釣手引 艸間の明里』	天明8年(1788)	本所、深川にわけて陸釣りのできる場所を紹介している。中川は本所の部に登場し、木下川薬師から六ツ木にかけての釣り場が取り上げられている。
玄嶺老人	『漁人道知』	安永2年(1773)	『何羨録』に似た書籍で、「中川より釜洪梯迄春鱸之場」「中川より柿洪迄秋鱸之場」の中でハゼ釣り場が紹介されている。
武井周作	『魚鑑』	天保2年(1831)	いろは順で魚をとりあげた辞典で、はぜ「東都は芝浦及中川に産るもの上品なり」、しろうを「武蔵 角田川及び中川のものも桑名の種といへども水美なれば魚も亦美なり」と2種類の魚が紹介されている。

大橋青湖著『釣魚秘伝集』(昭和5年発行、昭和47年複製版)より作成した。

例えば、大正5年（1916）に発行された田山花袋の『東京近郊一日の行楽』には次のように紹介されています。

「……此処等（木下川）の中川は、蕭然とした一小川で、平凡な溝渠にすぎないような感じがするが、しかしこれから下流の方へ行くと、蘆荻などが多くなつていわゆる中川のきす釣なるものが盛に行われるのである。」

この文章を見ると、依然として中川の鱸釣りは盛んに行われていることが

記されています。しかし、一方では次のような記述も見られるのです。

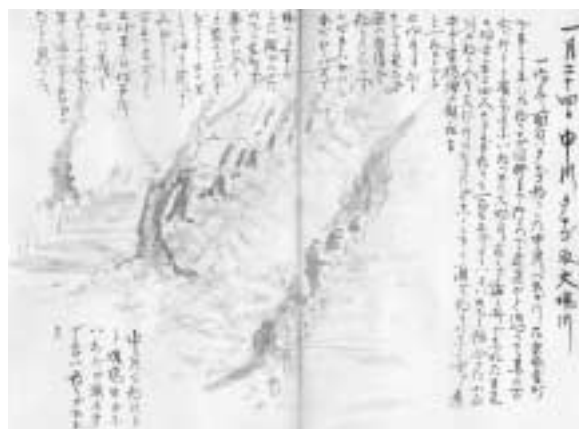
「その後明治四十年頃になつてから、鹿倉釣船屋、浅屋船宿その並びから下手の、六軒口あたりにエビ為などと云ふ船宿がありました。坂西橋附近の、もと番所のあつた處にも、船宿が二軒あつて此の附近で鮒がよく釣れたものです。今の鐵橋の上下、平井橋の上に行つて、醤油屋河岸、その前に家があつてその下や、肥料會社の處の上に梅屋敷などいゝ釣り場がありました。今は昔日の姿は見られません。」

これなど昔の思ひ出話ですが、當時は鮒も澤山あつたし、釣り人も少いし、一貫目位の鮒は必ずはずしたことはありませんでした。どうもこの頃はさう行かないので残念です。」

これは昭和8年11月に創刊された釣り総合雑誌『水之趣味』に投稿された「その昔の中川」という記事の一部です。この文章には中川では昔ほどの釣りが出来なくなつたことが記されています。釣り雑誌には海・川などの釣り場案内が紹介されており、それまでは口コミでしか情報共有がされなかつた釣り場がある程度は釣り人たちに認識されるようになりました。中川も第二次大戦直後までは東京近郊の釣り場として誌面を飾っています。このような情報源をもとにして、釣りサークルの幹事は釣り場を探して歩き回つたようです。この絵は戦後に市川釣友会の副会長をつとめた小早川遊竿が残した絵日記で、中川上流や支流の大場川での釣り場を探したことが記されています。

このように江戸時代から江戸・東京近郊の釣り場として、

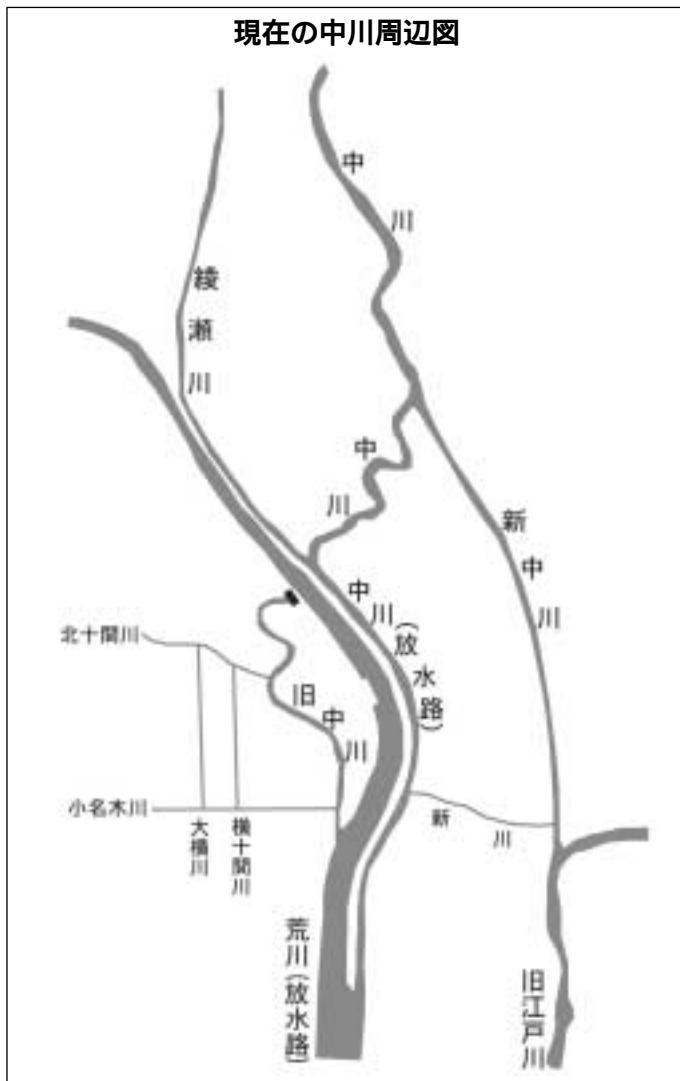
このように江戸時代から江戸・東京近郊の釣り場として、



小早川遊竿氏の絵日記（当館蔵）

多くの人々で賑わつた中川流域も高度成長期を迎える頃から一変しはじめます。工場や家庭排水によって川が汚され、水質汚濁が進みはじめます。昭和40年代にはこれを憂慮した東京都が旧中川の埋立計画を持ち出したほどでした。その後、工場が郊外に移転するなど、水質が徐々に改善されると再び釣り人の姿が見られるようになりました。江戸時代には鱸釣りの名所であった中川番前でしたが、現在は夏が近づくと頃からハゼ釣りの人々で賑わいます。今と昔では釣れる魚も変わりましたが、都内の手軽な釣り場として今も旧中川はほぼ昔の流路を保つたまま穏やかにたたずんでいます。

（中川船番所資料館 龍澤 潤）





旧大石家住宅友の会

開炉裏はた日記も回を重ね、今回で6回目となりました。第1回の「真夏の庭掃除」にはじまり、第2回が「障子貼り」、第3回「古民家と薪」、第4回「友の会」研修会報告」、そして第5回が「特別公開報告」でした。いずれも旧大石家住宅および同家を舞台とした活動の紹介ですが、そこには常に「旧大石家住宅友の会」の大きな力がありません。

同会については、これまで会員募集記事で紹介してまいりましたが、今回は「友の会」の保存活動について紹介いたします。

現在約50名が登録する「友の会」は、普段は屋内外の掃除や開炉裏への火入れが活動の中心です。各曜日(月、金)ごとにつくった班が、連携して保存にあたりますが、土・日・休日のみの公開のため、見学者への対応はありません。しかし、秋の特別公開(第5回に掲載)期間には、一般見学者への説明なども行います。



五月飾り

このように活動を通して、大石家のみならず地域の歴史をも学び、生かす場となっています。

また、「友の会」の力は、同家で開催される年中行事でも発揮されます。

同家の行事は、正月飾りに始まり、3月の雛飾り(桃の節句)、五月飾り・鯉のぼり、7月の七夕飾り、そして12月のす払いと続きます。その行事一つひとつの飾りつけや片付け、そしてす払いにも、友の会の皆さんの力が発揮されます。そのほかにも、庭掃除、薪割り、障子貼りなど、地道な活動も重要です。

旧大石家住宅は、江戸時代の末期に建てられた古民家です。その古民家の維持・保存は、友の会の日常的な活動に加え、季節を彩る催し物の準備、片付け、大掃除、薪割りなどの活動によって支えられています。

古民家が現代に伝える建築・生活文化は、社会が発展するほど、貴重なものとなりますが、それとともに「友の会」の活動も重要性を増していくのです。

***平日ボランティア活動が可能な方を募集しています。「旧大石家住宅友の会」の皆さんと一緒に保存活動に参加してみませんか。**

問合せ先 生涯学習課文化財係

☎ 3647 9819

平成17年度

民俗資料寄贈者リスト

今年度、文化財係に寄贈された民俗資料は次の通りです(寄贈順、敬称略)。

寄贈資料 寄贈者名(住所)

消火器(明治記念館旧蔵)ほか

田村 博(北砂)

東京都製材研鋸睦会団旗ほか

久米康一(東陽)

第一期種痘済証ほか

羽深基子(清瀬市)

襖櫓 見本セット 田島貞子(常盤)

イカリ 山下忠洋(市川市)

『江東区年表』 太田俊子(江戸川区)

検尺道具一括ほか 林栄次郎(台東区)

電車通学定期乗車券ほか

古屋幸一郎(白河)

『深川区女子親切部隊規約』ほか

平柳登美(板橋区)

丸山 茂(亀戸)

富士講行衣 鈴木 隆(亀戸)

古写真(亀戸) 宮本平八郎(江戸川区)

スライド「木場のはなし」

米長 一(海辺)

『建具図集』ほか 竹谷堅助(東砂)

サシほか 木下 実(大島)

『平久尋常小学校卒業記念帖』

十文字茂(横浜市)

第5回割引勧業債券 山田 明(亀戸)

御大礼記念往復乗車券ほか

花島 稔(江戸川区)

古写真(都電) 小宮リク(北砂)

都電「愛顧感謝乗車券」ほか

花村フサ子(北砂)

古写真(都電) 田中茂穂(亀戸)

スライド(都電) 松田博司(亀戸)

奉公袋ほか 長 澄子(白河)

古 銭 岡本和子(東陽)

火鉢ほか 上野純弘(大島)

このうち、題目曼茶羅と富士講行衣は区の有形文化財として登録されているものです。また、林栄次郎氏寄贈資料は深川江戸資料館企画展「深川木場の歴史と文化」で、都電関係の資料は江東区文化センター「城東電車と都電の想い出」で展示した資料の一部です。今年度もご協力をお願いいたします。

工匠番館・式番館



常設展示替え

工匠番館(森下文化センター内)では、17年度に購入した、近藤良治氏作「振袖 八色グラデーション」(無地染)と木全章二氏作「ライトスタンド」(組子)を展示しました。式番館では職人さんが実際に使用していた道具のいくつかを展示しました。